神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

近世南西ルーシの書き言葉の名称について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2007-09-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/593

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

近世南西ルーシの書き言葉の名称について*

岡　本　崇　男

1　はじめに

表題の言語は，リトアニア大公国（後にポーランド・リトアニア連合王国）の領土に組み込まれた南西ルーシ，すなわち現在のベラルーシおよびウクライナで発達した東スラヴ語の書き言葉のことである。

この言語の本格的な研究は，すでに 20世紀初頭から行われているのだが，名称がまだ統一されていない。例えば，現在使用されているものでも(1)《старабеларусская мова》（古ベラルーシ語），(2)《староукраїнська мова》（古ウクライナ語），(3)《канцелярский язык Юго-Западной Руси》（南西ルーシの事務言語），(4)《литературный язык Юго-Западной Руси》（南西ルーシの文章語），(5)《руська мова》（ルーシ語），(6)《проста(я) мова》（俗語）などがある。これらのうち，(1)と(2)はそれぞれベラルーシとウクライナでの一般的な呼称であり，(3)と(4)はロシアでしばしば用いられる。(3)は14世紀頃から，(4)は16世紀後半から南西ルーシの東スラヴ語文章語に与えられた呼称である。(5)と(6)はそれぞれ，名称(3)と(4)に対する当時の南西ルーシにおける呼び名であり，徐々にこれらの使用頻度は高くなっているようだが，引用符なしで用いられることはない。

＊本論文は平成 19年度科学研究費補助金の成果の一つである（種目：基盤研究(B)，課題：「ロシア諸年代記の語彙特徴と事項別記事内容に関するPC利用の比較対象研究」（課題番号17320048），代表者：名古屋学院大学教授・中條直樹）。

このような用語の不統一の状況は，東スラヴ語圏以外でも大きな違いがない。例えば，英語の名称だけを例にとっても，“Old Byelorussian” があれば，“Old Ukrainian” もある。しかし，現在では，中世ヨーロッパ世界で通用していた東スラヴ地域（すなわち，Русь）のラテン語名称 Ruteni に起源を持つ “Ruthenian” の使用頻度が高いように思われる。また，ここでもやはり引用符で括られていることに変わりはないが，“prosta mova” と呼ばれることもめずらしくなくなった。

このように，東スラヴ語の歴史的研究において，その研究対象の一つとなる言語の名称の不統一が世界的規模で放置されているのである。本論文は，こうした状況が生まれた原因を明らかにするとともに，暫定的な解決案を提示することを目的としている。[1]

2　名称問題の二つの局面

近世南西ルーシの書き言葉の名称の問題には二つの別々の要素が関係している。

先ず，第一に，この言語を司法と行政の公用語として採用していた国家（リトアニア大公国，後にポーランド・リトアニア連合王国）は既に存在しておらず，かつての領土のかなりの部分が現在のベラルーシとウクライナに属している。このため，この言語を二つの東スラヴ語の直接の先祖として位置付けて，「古ベラルーシ語」あるいは「古ウクライナ語」と呼ぶことは不可能ではない。実際に，この言語は行政・文化の中心が，はじめベラルーシ側にあった時代は，ベラルーシ語的な特徴をふんだんに持っていたのだが，文化の中心が徐々にウクライナ側に移るにつれてウクライナ語的な要素が採り入れられ，さらにポーランド語の強い影響を受けて，ベラルーシ語ともウクライナ語ともつかない混成言語となってしまったために，どちらかの言語

1　なお，この南西ルーシ文章語の名称問題を考える上でもっとも多くの示唆を与えてくれたのは，この言語の実体について詳細に論じた Moser（2002）である。筆者にこの論文のコピーを提供してくれた森田耕司氏（ポーランド，ヤギエヴォ大学）にこの場を借りて謝意を表する。

の先祖だとみなすこともできるし，そうすべきでないということもできる。

この地域のかつての書き言葉と，現代の東スラヴの標準文章語とのつながりにかんするB・A・ウスペンスキーの説明は示唆的である(引用中の「俗語」とは，近世南西ルーシの書き言葉の名称の一つ《проста мова》の便宜的な訳語である)。

> 矛盾しているように思えるかもしれないが，ロシア文章語の歴史にとって「俗語」が持っている意義は，この現象がウクライナ文章語史やベラルーシ文章語史にとって持っている意義よりも大きくないにしても，小さいことはない。実際に，「俗語」は現代のウクライナ語とベラルーシ語にほとんど何の影響も及ぼしておらず，ウクライナとベラルーシの地域のその後の言語状況にも影響していない。しかし，ロシア文章語史に対しては，南西ルーシの言語状況の構成要素としての「俗語」が極めて重大な影響を与えているのである。こう言えば充分であろう。今日われわれが「ロシア語」と「教会スラヴ語」が対立関係にあると言う場合，つまり「ロシア語」が「教会スラヴ語」の対極に位置すると言う場合は，大ロシアではなく，南西ルーシの伝統に従って，用語を使用しているのである。つまり，この使用方法には16—17世紀南西ルーシの言語状況が反映されているのである(Uspenskij (1994, 86))。[2]

つまり，北東ルーシ，すなわちモスクワ大公国では，「ロシア語」と「教会スラヴ語」の適用分野に競合がなく，互いに棲み分けながら共存するというキエフ・ルーシ以来の言語伝統が守られており，言語使用者にとってこれら二つの言語はいずれも「ロシア語」(русский язык) だと意識されていたのだが，南西ルーシでは，「俗語」が適用分野を徐々に拡大して，聖典言語の「教会スラヴ語」と対立関係にあったという状況が，現代ロシア語が成立するための重要な刺激となったというのである。そして，皮肉なことに「俗語」を育んだベラルーシとウクライナの現代の標準文章語は「俗語」の延長

2　Shevelov (1980, 150-154) は，現代ウクライナ語の成立に「俗語」が果たした役割を重視している。

上に成立したものではないということなのである。

確かに，現代ベラルーシ文章語と現代ウクライナ文章語は，18世紀末から19世紀の最初の四半世紀にかけて近代文章語としてすでに完成していたロシア語を強く意識することで成立したと考えることは可能である。実際に，これら後発の現代標準文章語の形成に寄与した人々の多くはロシア標準文章語の使用者でもあったことも事実である。

結局，近世の書き言葉と，現代の標準文章語とを無理なく結びつけられるような漸進的な発展過程が確認できず，ある段階から方向の定まらない時期がしばらく続き，一足飛びに現代語の基礎が固まる段階に飛躍してしまうというのは，現代の三つの東スラヴ文章語に共通した現象のようである。つまり，ある一定の期間，言語伝統が中断している。

したがって，近世南西ルーシ語のような複雑な性格を持った言語に現行の地名を冠してしまうと，どうしても現代語との関連を意識してしまい，この言語の本質をわかりにくくさせてしまうおそれがある。また，かつてこの言語を使っていた人々には，モスクワとの政治的な境界が意識されていたとしても，ベラルーシとウクライナという区別はまだなかったのだということが理解されにくい。

この意味で英語の“Ruthenian”は上記の問題を回避できる優れた名称であるということができる。すでに述べたようにこれは中世のルーシ（Русь）を意味するラテン語に起源を持っている。つまり，対応する東スラヴ語は《руська мова》（あるいは《руський язык》,《русский язык》など）なのである。確かに，14世紀以降，南西ルーシで東スラヴ語の書き言葉はそのように呼ばれていた。しかし，形容詞の руський（русский）と現代ロシア語の русский は，形の上ではほとんど同じものであっても，意味内容が全く異なっている上に，後者が現在のロシア民族およびロシア語と結びついているので，この形容詞を使った名称は「古ベラルーシ語」や「古ウクライナ語」と同じように不適切である。そこで，東スラヴ語ではこの言語を《проста

(я) мова》すなわち「俗語」と呼ぶことで，名称の混乱状態が解消されるのではないかという期待が生まれる。[3]

しかし，南西ルーシの東スラヴ語の書き言葉の名称にはもう一つ解決すべき問題が残っている。先に，《руська мова》(「ルーシ語」) は14世紀頃に，《проста мова》(「俗語」) は16世紀頃に，当時の東スラヴ語文章語に与えられた呼称であると述べた。ところが，これら二つの名称の関係について，簡単に説明することができないのである。少なくとも新しい名前が古い名前に取って代わったということではない。16世紀のある時期からは二つの名称が共存することになる。ここで問題となるのは，この二つの名称が同じ言語に対して与えられたものなのか，それとも「ルーシ語」と「俗語」の間に何らかの具体的な相違が認められるのかということである。そして，これは教会スラヴ語と東スラヴ語の適用領域が相補分布の状態であることによって，二つの言語体系が安定的な共存関係を維持していたキエフ・ルーシとは言語状況が違っている。教会スラヴ語はバルカン半島の南スラヴ語を母体とした古スラヴ語がキエフ・ルーシの土壌に適応した文語であるので，同じスラヴ語であるとはいえ，土着の東スラヴ語とは言語構造が同じではない。これに対して，「ルーシ語」と「俗語」は，いずれも東スラヴ語で，基本的に構造上の差がないはずである。このような条件で，これら二つの言語になんらかの違いがあるとすれば，それは機能面に見出されることになろう。

3　東スラヴの書き言葉の二つの段階

「ルーシ語」と「俗語」の機能面の違いというのは，それぞれの言語の適用分野の種類と範囲の違いのことをいう。近世南西ルーシにおいて初め東スラヴ語が適用されたのは司法や外交の領域であった。つまり，いわゆる「官庁言語」，あるいは「事務言語」だったのである。しかし，この言語は次第

3　ロシアにおいても "Ruthenian" に倣って《рутеньский (язык)》という呼び名を使用する研究者もいるのだが (Ivanov (2005))，現在のところまだ例外的な事例のようである。

に役所の外に活躍の場を見出して，やがて宗教や学術そして最終的には文学の言語へと成長する。そして，この汎用の文章語に成長した東スラヴの書き言葉が「俗語」と呼ばれている。[4]

これら二つの段階を名称の上で区別することは，しばしば行われている。ウクライナからアメリカに渡ったスラヴ学者で，歴史時代以前のスラヴ語音韻史やウクライナ語音韻史の研究で知られる George Shevelov は，初期の段階を "Ruth" と呼び，多機能文章語としての発達を遂げたものを "Ruthenian" (Shevelov (1980))と呼ぶ。しかし，"Ruth" という名称は，"Ruthenian" をもとにして作られた新造語であるのだろうが，多くの人に奇異な印象を与えてしまうかもしれない。[5] 一般的な区別の方法は，英語であれば "Belorussian" に対して "Belorussian literary language" (McMillin (1980))，ロシア語であれば《деловой язык》あるいは《актовый канцелярский язык》に対して《литературный язык (Юго-Западной Руси)》(Uspenskij (1994)) というように，「俗語」の名称に汎用性の意味合いを持たせる形容詞《литературный》(およびこの英訳である "literary") を使用することである。つまり，言語の適用領域の広さが強調されている。一方，староукраїнська мова》，《старабелорусская мова》という呼び方を採用している研究者は，この種の区別にあまり関心を示さない。また，"Ruthenian" 系の呼び名（独 ruthenische, 仏 ruthène など)を使用する研究者も，リトアニア大公国の事務言語となった時点から，東スラヴ語の書き言葉にこの名称を使用するのが普通であるので，むしろ先に紹介した Shevelov (1980) の用語法はむしろ例外に属しているといわねばならない。 上の二つの立場，つまり，発達

4 「俗」(простъ) の意味について，Uspenskij (1994) は17世紀に「俗語」(lingua sclavonica) の規範記述を試みたイヴァン・ウジェヴィチの定義に基づいて，"lingua *sacra* sclavonica" (教会スラヴ語) と "lingua *popularis*" (口語＝西ウクライナ方言) の中間に位置する "lingua *rustica*" だと説明している (66, 74, 86)。一方，Moser (2002, 224-227) は，「俗」にたいして "rustica" (田舎の，野卑な，土着の) というラテン語形容詞を充てるのは不適切だとし，「(聖典言語の) 読み書きを知らない」，「世俗の」人々のための言語を意味するドイツ語 "Gemeinsprache" の概念を移入した結果生まれた名称が「俗語」であると主張している。

5 "Ruth" という言葉から一般的に理解されるのは，旧約聖書諸書の一つの主人公であり，書名ともなっている女性の名前であろう (「ルツ記」)。

の程度に差があるとはいえ，基本的には同じ言語であるのに名称の上で区別する立場と，一つの名称で通す立場の違いは，結局のところ，言語の機能的発達を強調するか否かというところにある。もっとも，文章語としての発展を強調しない場合でも，その多機能性に無関心であるというわけではなく，むしろ最終的な発達段階がその言語の基本的なイメージとなっていると考えたほうがよさそうである。しかし，ある言語が社会において果たす機能に変化が生じたからといって，あえて呼び方を変える必要があるのだろうかという疑問が生じる。実際に，現在から見ればあきらかに構造的に異なる二つの言語が共存しているように見えても，その言語が使われている社会においては，一つの言語が存在しているとしか認識されていないというキエフ・ルーシの例もあるのだから（Uspenskij（1994, 6-8)），呼び方を変えないほうが現実を反映しているということもできる。

ところが，近世南西ルーシの社会においては，キエフ・ルーシと状況が違っていたようである。16世紀後半から見られる現象らしいのだが，[6] 東スラヴ語文章語の担い手自らが「俗語」で書いたと主張するようになり，17世紀以降特にこれが顕著になるらしい。つまり，書き手が「ルーシ語」ではなく，「俗語」を使っていることを強く認識しているのである。したがって，この場合は，書き手の自己申告に応じた呼び名を用いる方が現実を反映している。

当時の書き手が，自分たちの書き言葉を「俗」（простыи（язык)，проста（мова)...）と形容することにこだわったことについては，すでにいくつかの説明が試みられているのだが，第一の直接的な原因は，リトアニアとともに国家を形成していたポーランドの言語状況の影響を受けたということらしい。すなわち，ルネサンス以降，土着語を基礎に持つ新たな書き言葉が発達し，正統な書き言葉として特権的な地位を持っていたラテン語の適用領域を侵食していくというヨーロッパの言語状況の変化の方向が，15世紀のボヘミアの教会改革，そして16世紀の宗教改革で決定的となり，土着語が文章語と

6　Jefremov(1995, 118－119)

してさらに洗練されることとなる。そして，ポーランドもその影響を直接受けた結果，民族語であるポーランド語が超民族的なラテン語に対抗する文章語として発達しようとしていた。東スラヴの「俗語」もこの流れに乗って作り出された言語なのである。この場合，ラテン語に相当する特権的な言語は，教会スラヴ語ということになる Uspenskij（1994，70）。

4 「俗語」にまつわる二つの矛盾点

ポーランド・リトアニア連合王国において，東スラヴの「俗語」が帯びていた性格は極めて明確であった。それはポーランド語と教会スラヴ語に対抗することを目的とした言語であった。ポーランド語は「俗語」を生み出す動機となった言語であるとともに，カトリック教会の象徴でもあった。これに対して東スラヴ語と教会スラヴ語はギリシャ正教および帰一教会[7]の拠所だったのである。しかし，ギリシャ正教徒にとって，教会スラヴ語はあくまで教会の言語であり，ラテン語のような実用性も持ち合わせていなかったため，ポーランド語に匹敵する実用的な書き言葉に対する欲求が生まれても不思議ではない。このため，「俗語」は1696年に公的な使用を禁止されるまで，カトリックに対抗しながら新しい民族文化を切り開くための旗印としての意義を持ち続けたと考えられる。

しかし，「俗語」は大きな矛盾を抱えた言語でもある。第一の矛盾は，これほど性格付けが明確であり，当時のリトアニア大公国の社会においてその存在が認知されていながら，「ルーシ語」との違いが明確ではない。ただし，言語構造が不明確だというのではない。すでに述べたように，「俗語」と「ルーシ語」の違いは，構造ではなく適用領域にある。ところが，McMillin

7　1596年のブレスト公会議で合意されたローマ・カトリックとギリシャ正教の教会合同にもとづいて設立された教会。ローマ教皇の首位権を認めるが，ギリシャ正教の儀礼を守るという折衷的な性格を持っている。聖書の言語も教会スラヴ語であった。また，ギリシャ正教徒と帰一教徒は，自分たちがカトリック（およびプロテスタント）教徒でないという点で心情的な親近感を持っていて，それぞれ互いの教会にも遺産を贈与することがあったらしい（Frick（2005，52））。

(1980, 106－107) が「俗語」(“Belorussian literary language”) の典型的な文献の例として名前を挙げたものを見ると，フランツィスク・スコリーナ (?－1540) が自分の教会スラヴ語訳聖書に付けた序文に始まって，『リトアニア法典』(1529年，1566年，1588年)，『バルクラボフ年代記』(1562－1608年) などのほかに，シモン・ブドニ (1530－93) やヴァシリ・チャピンスキー (1540－1603) の神学にかんする著作，そして西欧の中世文学の翻訳など多方面に及んでいる。また，『ペレソープニツァ福音書』(1556－1561) を新約聖書の「俗語訳」とみなす研究者もいる (Ohienko (1995, 103))。本来，事務言語の適用領域であったはずの法典も16世紀には「俗語」文献とみなされるのだとすると，「ルーシ語」は「俗語」に吸収されてしまったと考えることができる。しかし，司法や行政の公用語としての「ルーシ語」は17世紀末まで存続したのであるから，この名称を捨てる必要はなく，年代記や神学論争の文書，そして聖書注解や聖書テキストそのものの翻訳に使用された東スラヴ語が「俗語」だと言っても良いかもしれない。いずれにしも，二つの言語の境界は漠然としている。長年にわたって「俗語」を研究しているミヒャエル・モザーはこれら二つの言語の関係について以下のように述べている。

> ……「俗語」は主として世俗の意思伝達の言語であり，また実践的神学の言語であった。基本的にこの言語はポーランド語がポーランド人の間で果たしているのと同じ機能を果たすべきものであった。「俗語」は民衆の言語と同じではなかったのだが，どうも当時の人々には「ルーシ語」の理想形だとみなされていたようである。そして，「俗語」が生きた言語だと考えられていたために，その規範記述の必要性を人々は認めなかった。(Moser (2002, 250))

結局，「俗語」はその言語の実体がどうであるかにかかわらず，ある種特権的なイメージを付与されていたようである。

ところで，「俗語」にはもう一つの矛盾点が存在している。この言語は，多機能文章語として発達するにつれて，ポーランド語との差がなくなって行

き，時にはポーランド語をキリル文字で写したものと変わらない状態になってしまう。これは多くの研究者に指摘されている事実である（Uspenskij (1994, 68), Frick (2005, 55-57), Moser (2002, 254))。特に，1569年のルブリン合同でポーランドの社会・行政制度がリトアニアに導入されてから，「俗語」のポーランド語化が急速に進んだらしい。つまり，実質的に言語は変質したのである。ポーランド語に対抗する文章語を育て上げることが目標であったはずなのに，できあがった言語は東スラヴ語化されたポーランド語であったというのは皮肉な結果であった。しかし，この言語を東スラヴ人の社会は違和感を示すことなく受け入れている。なぜなら，主要都市では話し言葉もポーランド化した，つまりポーランド語が日常語になったのである。したがって，「生きた言葉の理想形としての『俗語』」という位置付けには何の変化も起こらなかったのかもしれない。そして，東スラヴ系住民が自己同定するための唯一の印はキリル文字だけになってしまう。Frick (2005, 55) によれば，実際に，多くの行政・司法関係の文書や証書類は，その本体のテキストがポーランド語であろうが「俗語」であろうが，書き出しと最後の部分は「俗語」で書かれていて，まさにそこにこの言語の象徴的な意味があった。

意外なことに，「俗語」が担っていた対カトリック・対ポーランドという象徴的な意味は，むしろ教会スラヴ語に引き継がれる。つまり，ギリシャ正教徒および帰一教徒にとって，教会スラヴ語は，「俗語」の対極に位置する神聖語であり，親しみのない非日常的な言語であった。ところが，16世紀末から17世紀にかけてこの言語の規範記述が精力的に進められる。すなわち，ラヴレンチー・ジザニーの文法書と語彙集（1569年），メレーチー・スモトリツキーの文法書（1619年他），パンヴァ・ベリンダの教会スラヴ語辞典（1623年と1657年）などによって規範の拠所となる書物が整備された。また，旧約聖書と新約聖書の全テキストが収められた『オストローグ聖書』が1581年に完成している。そして，これらの規範書と聖書はいずれも印刷出版され

ていることから，17世紀南西ルーシにおいて教会スラヴ語が復活し，その意義を増大しつつあったことがうかがえる。しかし，同じ時期にポーランドではポーランド語の規範記述の試みがなされ，旧約･新約聖書のポーランド語訳（例えば，シモン・ブドニの『ネスヴィジ聖書』，1572年）が完成していることと比較すると，南西ルーシでは発展の方向が違ってしまったかのような印象を受ける。確かに，Uspenskij（1994）が主張するように，教会スラヴ語の規範化のプロセスは「俗語」の規範化のきっかけになったということは否定できないことなのだが，教会スラヴ語が反カトリックの象徴となった時点で，「俗語」の使命は終わったといえなくもない。実際に，メレーチー・スモトリツキーの教会スラヴ語文法と『オストローグ福音書』は，モスクワ大公国に受け入れられて，17世紀のロシア教会スラヴ語改定事業に寄与したことが知られている。そして，この新しいロシア教会スラヴ語は，ウクライナやベラルーシだけでなく，他のスラヴ諸地域の正教社会においても象徴的な意味を持つに至った。「俗語」に始まった文化的な活動が，姿を変えてさらに大きくひろがったと考えることもできる。

5　おわりに――名称を区別すべきか，統一すべきか

東スラヴ語の言語構造を維持しながら，語彙や表現がポーランド語化され，最終的には教会で説教師がポーランド語のテキストを見ながら「即興で」（‘on the fly’）「俗語」に翻訳して聴衆に語りかけられるようになってしまった（Frick（2005, 56））という言語の内容的な変質は決して見過ごされるべきことではない。なぜならば，「俗語」テキストの究極の姿は，東スラヴ語らしさがアクセントなどの音声面と接辞形態素や語尾などの形態面にしか保たれておらず，ポーランド語との本質的な違いの言語であったからである。しかし，もしこの言語の文化的な意義付けに変化がなかったのであれば，名称を区別すべきか否かということは，あまり重要な問題ではないように思える。「俗語」という名称が，その実質的な意味を時代とともに変化させなが

ら，リトアニア，ベラルーシ，ウクライナにおいて継続的に使用されてきたことは，Shevelov（1980）などによって証明されている。したがって，反ポーランド語（＝反ローマ・カトリック）で，反教会スラヴ語（＝東スラヴ人の汎用文章語）という象徴的な意義を「俗語」が担っていた16世紀から17世紀末までの期間の東スラヴ語文章語は，その適用領域がなんであれ「俗語」と呼ぶことができる。そして，主たる活躍の場が司法・行政に限られていた時代の文章語は，必要に応じて，「初期の」と但し書きをつける配慮が必要かもしれないが，原則として「俗語」と呼んで差し支えないと思われる。

参考文献

Frick (2005): David Frick, "The Councilor and the Baker's Wife: Ruthenians and Their Languages in Seventeenth-Century Vilnius." In: SSO (2005). 45-67.

Issatchenko (1980a): Alexander V. Issatschenko, "Russian." In: SLL (1980). 119-142.

Ivanov (2005): Вячеслав Вс. Иванов, "Языки, языковые семьи языкове союзы внутри Великого княжества Литовского" В сбор.: SSO (2005). 93－121.

Jefremov (1995): Сергій Єфремов, *Історія українського письменства.* (Київ-Leipzig, 1919) Київ. 1995.

McMillin (1980): Arnold McMillin, "Belorussian." In: SLL (1980, 105-117).

Moser (2002): Михаэль Мозер, "Что такое 《простая мова》?" *Studia Slavica Hungarica.* 47/3-4. 2002. 221-261.

Ohienko (1995): Іван Огієнко (Митрополит Іларіон), *Історія української літературної мови.* (Winnipeg, 1949) Київ. 1995.

Shevelov (1980): George Y. Shevelov, "Ukrainian." In: SLL (1980, 143-160).

SLL(1980): Alexander M. Schenker and Edward Stankiewicz (ed.), *The Slavic Literary Languages: Formation and Development.* New Haven. 1980.

SSO (2005): Vyacheslav V. Ivanov, Julia Verkholantsev (ed.), *Speculum Slavicae Orientalis: Moscovy, Ruthenia and Lithuania in the Late Middle Ages.* (UCLA Slavic Studies. New Series. Vol. IV).

Moscow. 2005.
Uspenskij (1994): Б. А.Успенский, *Краткий очерк истории русского литературного языка* (*XI–XIX вв.*). Москва. 1994.